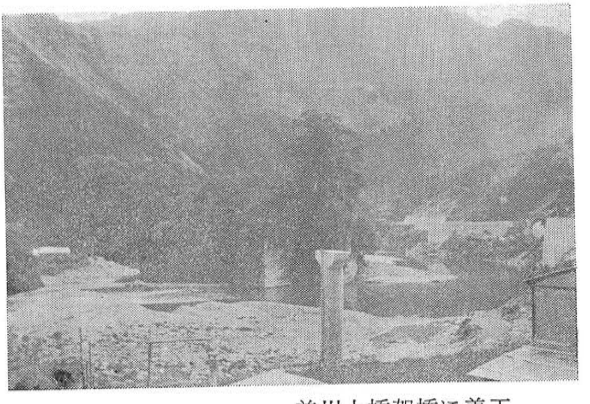
第一二篇　美川村二〇年の回顧



美川大橋架橋に着工

合併前後の思い出……初代村長　土居　通栄……三七七
過去一六年を顧みて……村　長　新谷　優……三八二

合併前後の思い出

初代村長　土居通栄

私は弘形村最後の村長として昭和二二年一一月に就任し、新村美川村の初代村長として昭和三四年四月まで、通算一二年六ヶ月勤めたことになる。

昭和も五〇年を迎えると終戦前後の混乱期を経験した人たちも五〇歳以上となっている。村民の四分の三は、ほとんど戦争を知らないので、村誌の本文に語られてない私の経験を少し述べてみたい。

太平洋戦争は昭和一六年一二月八日に、日本軍のハワイ真珠湾攻撃にはじまった。弘形村からも次々と応召者が出て留守家庭が多くなっていくので、組々で共同耕作をして食糧供出の完遂を期して、銃後のつとめにはげんだ。また軍馬の乾草飼料、飛行機用潤滑油搾取のためヒマワリ・ヒミー剝皮、松根油、生松液採取、火薬製造、犬の脳下垂体を飛行士の特殊な用に供するため撲殺供出などをした。公務員も出勤までの早朝に乾草刈取り、松根掘りをし、休日にも戦力増強のため働いたし、国民学校も四年生以上は松根掘り、乾草、ラミー採取に働くいじらしい姿が見られた。こうした銃後の努力も空しく、戦局はしだいに不利となり、遂に昭和二〇年八月一五日に天皇の終戦の詔の放送で戦争は終結し、日本は連合軍の前に無条件降伏をした。日本国の敗戦の痛手は大きかった。「国破れて山河あり」の嘆き、精神的虚脱、実に疲労困憊の極に達した。

私はそんな昭和二二年一一月一二日に村長として初登庁してみて驚いた。その年の産米の農家への供出割当指示が出してない。当然県への割当報告がされてない。期限は一一月一五日である。農民には虚脱もゆるされていない、食管法による供出行政は全国民の生命に関するきびしい事務である。さっそく割当作業に取組み、農業会の職員と基礎資料にしたがって二夜三日というもの不眠不休で、やっと作り上げて、村内各部落へは特使を走らせ、地方事務所へ割当報告を持参し、まず一安心した。

ところが翌一六日に登庁してみると、なんと玄関に地下

足袋が二〇足ばかり脱ぎ揃えてある。「何事だろう」と入って見ると、村民の供出割当の苦情である。やれ家には病人がいる、老人だけだ、妊婦がいる、乳飲み児を抱えている、とても応じられぬという。私はいちいちその申し出を聴き、ごもっともと同情申し上げるが、供出割当は各戸の認印を受けた反別による無理のないもので、地力調査もしてあり、収穫見積高標準の上に立っておる。と前置きして、見聞に基づいて全国的食糧窮乏の実例から相互扶助、共存共栄の精神で難局を打開すべきであると白隠・道元・盤珪禅師の法話まで持ち出して協力を懇請した。しだいに村民の態度も軟化して、少し配当をへらしてもらいたいと言い出した。しかし村供出四〇〇〇俵をどう割替えても、村内の他の人に無理を押しつけるだけである。もし供出して保有米がなくなった時は、転落農家として食管法によって大人米麦一合七勺を即日配給しましょうと言い、やっと納得して帰ってもらったのが午後八時であった。

その翌一七日も、また地下足袋が一五足ほど脱ぎ揃えてある。はいってみると別の部落の人たちで昨日同様に、供出割当の苦情である。今日は少し馴れて来て、昨日の要領で話し合い、少しは笑い声も出るようになり、午後七時までに話がついた。

翌一八日は供出米搬入状況を視察に出かける。米検倉庫は上黒岩と日野浦とに二庫あった。上黒岩に立寄ってみると有枝、大川、上黒岩からトラックで搬入しており、食糧検査員が名柄を定め、農協職員が量目検定、人夫が積込み、戦場のような忙しさである。今日は苦情もないようで楽観していたら午後一時ごろ一人見えたので今まで通りに懇談した。非農家の人だったが、翌日リヤカーで自ら二俵を運んで完遂してもらった。感激であった。

こんどは実状視察のため供出割当の最も多い部落に入って見た。じゅうぶん顔を知られてないのを幸い水戸黄門式に行脚した。粗末な衣類に地下足袋、脚絆という支度である。海岸地方から婦人、老人が塩魚や干物などを背負って来る。都会からは古着を運んでくる。こうして食糧と交換して帰るのである。まず部落入口で老女が、この人たちに「今日は何を持って来たかナ?」と問う所から、実状を見せてもらった。この光景は昭和二六年ごろまで四・五年つづいた全国的現象でもあった。当時としては無理もない物

資不足で、これで双方が生き抜いたのだった。

しかし供出は確保せねばならない。米麦のみならず、とうもろこし、大豆、小豆、馬鈴薯、甘藷まで供出は厳しく、村長の命取りとまで言われていた。特に米麦について拒否した者は強権を発動され刑法上の処分を受けるのであった。

二二年産米は順調に搬入されて供出完了報告を待っていた所、雪の降るころになってわずか四、五俵供出不能と申出る部落が出たため夜間に出張して事情を聴き懇談した。収納して見ると案外の不作でどうにもならぬという。集まった委員も同情する始末。明晩組内全員で協議することで散会したのが午前二時、今のように車もないので暗い気持で自宅に帰ったら午前四時だった。しかし翌晩は組内全員協力して五俵供出することに決定した。午前一時までかかったが帰りはうれしかった。

ところが数日たって上黒岩倉庫に搬入する筈の一部落が、わずか二俵半供出不可能というのでまた夜間に話し合いに出かけたが、自暴自棄的な態度、言動で話が進展しない。その考え方では将来日本は自滅するとまで烈しく説得したがだめ、けっきょく隣接部落に代納してもらうことで午前二時に解散したが、私は帰りの凍結した坂道ですべって転び、しばらく起き上ることが出来なかった。これ程にせんと駄目なら村長をやめようか、と思ったが古人が艱難にあたって「限りある身の力ためさん」と言ったことを思い出し、勇を鼓して午前三時に家に帰り着いた。

その年、供出完遂で県から表彰をうけた。その賞金に村費若干を加えて中学校の演習林を購入した。いま中央中学校の下にある植林地は僅かではあるが、その年の供出完了の記念林である。

村長就任のころの公共施設の荒廃振りは、長い戦争中放任されていて、全くひどいものであった。村民から伝染病舎の裏山が崩壊して奥半分が埋没している。平井橋が老朽化していて馬が脚を落した。駐在所からは、「村長、一晩宿直に来て見てくれ」という。「それはまた、どうした事か」と聞くと、昨夜寝ていたら、イタチが出て来てふとんの上でダンスをした、という。さっそく翌日廻って見ると三ケ所とも申し出に間違いない。長い間、よくも辛棒したものだ。急いで復旧しなくてはならぬが、さて困った。物

統令により制限配給で物資がない。財源はない。緊急に村議会を開いて審議してもらったら、非常時だ、非常手段を取れということになり、各種団体にはかって、木材は村民の寄附、伐出しも搬出も村民の勤労奉仕で、突貫工事を進めることになった。

駐在所は位置が適当でないので隣接地を買入れた。土地造成は消防団員、石積みは日野浦の中山乙逸氏が担当、献身的に働いてくれたことを思い出す。木材は部落に配当し、伐木から国道まで搬出し、農協のトラックが平岡英男氏、安宅福松氏の製材所まで運び、両氏の奉仕で製材してもらった。セメント、ガラス、釘も村民のチケットを借用して整えることが出来て、三ヵ月で完成させた。当時のようすを思い出すと、まことに有難いことであった。こうした村民各位の誠意に満ちたご協力は新制弘形中学校の建築のとき、もっともよく発揮されたのであったが、これは学校の章で述べておいたので重複を避ける。

私の村長としての最大の思い出は、やはり町村合併の過程と新村発足当時の種々の問題であるが、これもすべて本文にゆずって二、三のエピソードを記すにとどめる。

県の指導で弘形村、柳谷村、中津村、仕七川村を一ブロックとして協議会を組織し、会の都度、その動向を村民に伝達して村民の意見を謙虚に聞いて、次の協議会に持寄るという方法を取っていた。

そのころのこと、村の有力な青年が或る日、村長室の前の廊下を、「村を分断する合併は断じて反対！」と叫んで行ったり来たりする、聞き捨てならんと、翌日青年の部落に出かけて調査すると、弘形村の下は柳谷村へ、上は仕七川村へ合併する方針だと二、三の者が流言を飛ばしたものとわかった。弘形村ははじめから村民感情を尊重して合併形式は「対等合併」の方針で出発している。神奈川県の蘆の湯村は人口一〇〇人足らずで合併不可村として一村を守っている。選り食い的な分割による合併は断固阻止する決意を、益々強くした。

いよいよ合併の村がきまり、最後の調印の段階に、「庁舎を弘形村御三戸に設置するのだ。地元村は一五〇万円寄附せよ」などという風説が流れた。そんな不合理な話はない。お湯も沸騰点に達したら誰かが蓋を取る、庁舎の位置については弘形村は白紙、作為的なことは一切しない、機

の熟するまで発言を差控える申し合せをしていた。

ところが仕七川村役場の二階で協議会が行われた時のことだった。面河村からも代表者が出席していた。元老新谷善三郎氏が西の隅に着席し、私もその隣りに着席していた。懇談の途中で、新谷氏は、

「どうぞ、もうまあ庁舎の位置を極めんといくまいが—。なんじゃかじゃ言うても、御三戸は国道三三号線沿いで面河川、久万川の合流点じゃ。下から来ても上から来ても、仕七川から行ってもほゞ中央ぞ、御三戸にしてはどうぞ。異議があるか?」

と、私の背中をポンとたたいた。まことに鶴の一声だった。古武士の慨があった。場内だれ言うともなく、「まア、そうですなア」の声が各所で起った。

議長は、「異議がなければ、庁舎の位置は御三戸と決定しますが?」と発言すると、満場一致の強い拍手。これで決定。まことに快い印象として、いつまでも私の心に残っている。

村名については、各村で村民の意見を参考にして検討することになっていたが、余り関心はなかった。食事の休憩の時、二、三の人の間で、「三和村はどうぞ」「四ケ村の時は四和村かナ」「離縁したら二和村か—それはいかんナ」などと語り合ったりしたが、けっきょく「美川村」という自然環境にふさわしい新村名が生れたのだった。

過去一六年を顧みて

村長　新谷　優

昭和三〇年の合併に際し、仕七川村の議会議長を四年間勤めていた私は、当時の事情にも通じていたので村長選に立候補したが、先輩の土居通栄氏に惜敗した。確か五二票の差だったと思う。

しかし三四年の二回の選挙には村民の皆様の御理解を得て、土居氏の後任に坐る事になった。前村長とは合併問題で共に苦労をした間柄でもあり、種々御指導をいたゞき、精神的にはらくなすべり出しであった。

今は亡き黒川未千夫君が合併の部落常会で「村が広くなるが、足と目と耳をどう解決するか」という質問をした。これはまことに当を得た質問で、私はこれを村つくりの基本の一つと考え、座右の銘としている。

さて村長四期一六年、さまざまの思い出に満ちているが、この間に行なった事業を箇条書きに列記して見よう。

一、着任の五月から狼ヶ城の国有林の払下げ問題に着手した。これは合併後五ヶ年以内の条件つきで、以後は時効にかゝるのである。すでに四年は過ぎており、まだ何の見通しも立っていないので、早急に事を運ばねばならなかった。高知営林局から東京へとあちこち走りまわって、どうやら九月には見通しがついた。

二、新村も五年目、まず村民の融和を図ることが大切と考え、村民の意見を聞く村政として村政懇談会をはじめた。これはずっと今日まで継続されている。また体育の向上と親睦・理解を深める目的で村民体育祭・食生活の改善・農林業の推進を併せた地区輪番の農民祭を盛大に挙行することにした。

三、公平な行政をめざして、合併の条件である新村基本計画の完成と、前村長時代の布石を忠実に実行する事を考えた。しかし昭和三五年の国勢調査が示すように過疎現象がこのころから明確に現れてきた。因みに本村の人口の推移を見ると、昭和三〇年合併当時の九、九三一人が四九年九月末住民票で四、八〇九人となり、五、一二二人の減少を示している。現在の人口は明治二〇年頃の人口と等しい

のである。つまり明治二〇年から昭和三〇年までの七〇年間の集積が、その後のわずか二〇年の間に崩れ去ったので、まことに驚嘆の外はない。この過疎現象の原因は、夢のような月旅行をはじめ宇宙開発競争時代を実現するまでの急速な科学の進歩、豊富な原油がもたらす加工技術開発と産業構造の改革による高度経済成長、その歪みとして農林漁業など一次産業と他産業との所得格差の増大、教育の向上・生活向上の意欲等々、多種多様である。国も県も村も過疎対策は重要となってきた。まして山村のわが村としては、これこそ最も緊急重要課題となった。

四、政府は農林業振興と農林家の生活安定のため、昭和三六年農業基本法、三九年林業基本法、四〇年山村振興法、四五年過疎地域対策緊急措置法など、矢つぎ早に法律の制定をみた。また県も独自の低開発地域振興政策を、村も三九年六月に「美川村産業振興の構想」という小冊子を作って、葉たばこ・養蚕・茶・畜産・椎茸・優良材生産など基幹作物の選定と増産計画を示した。また国道・県道は勿論、道路網の整備（生活道路として村道及び農道・林道など足の解決策）地すべり・砂防・護岸・水路・開田など基盤整備事業の促進により生産の能率化、すなわち農林業の近代化と同時に農業外収入源の確保を図り、いっぽうでは農業協同組合・森林組合などの合併による強化策を推進し、過疎現象に対処することになった。

五、過疎対策の第二は文化生活の推進—特に目と耳の問題—すなわち「文化の里」づくりである。まず電話普及率の向上・自動化の促進・通話区域の整理統合であったが、四九年一一月二〇日柳谷局区域を最後として初期の目的を達成することができた。当局の御理解に感謝の外はない。

次はテレビ局の新設である。四二年一二月にＮＨＫの開局以来、愛媛・南海の民放も誘致運動の結果、四八年九月完了、また難視聴区域もほとんど解消して、山村としては恵まれた状態となったが、ここまで漕ぎつけるには仲々の苦労もあった。

また水清く空青く山は緑につつまれた美川の里とはうらはらに、飲料水については汚染の里である。上水道の施設こそ文化生活の急務であると考え、三六年以来漸次給水施設を整えつつある。

文化的遺産の開発とその保存・保護もまた大切である。

上黒岩遺跡はその一つで、幸い四六年に国の重要文化財の指定を受け、四六年に愛媛県知事から「文化の里」として指定を受けて施設の充実を図ることができた。しかし縄文文化遺跡のみでは文化の里としてはいささか物さびしさが感ぜられるので、現在四国最古の民家として国指定の重要文化財となっている宇摩郡別子山村の山中家の移築と、郷土館の新築を計画中である。

また足の問題として二箇部落への国鉄バスの誘致運動が目的を達成した。過疎化の中でこれも仲々困難であったが地元の熱心な協力、関谷代議士の援助、道路課の道路整備等々で四二年一〇月一三日に営業開始式が挙行された。当日バスを迎えた子供達の日の丸の小旗に涙を流したことだった。美川スキー場へのバス開通の時の感激もまた忘れられない。

六、人の幸福の第一義は健康である。過疎地最大の悩みは医療機関の不足であるが、さいわい本村は開業医師にも、また美川方式の内科・歯科の医療機関にも恵まれており、さらに母子健康センターでは助産・母子検診も行われている。また各種予防接種も年々盛んとなっている。昭和四九年四月九日財団法人結核予防会総裁秩父宮妃勢津子殿下より表彰状を授与せられ、つゞいて皇居で皇后陛下に拝謁の栄に浴したことは特筆すべき感激であった。

国民年金制度が昭和三四年四月一六日に制定されて二〇歳以上で被用者年金制度に加入していない人が保険料を納付し、老齢・廃疾の時に生活の安定を保証せられることになっている。本村ではこの制度の発足と共に広報や文書・説明会を開いてその趣旨の徹底をはかった。その時になってこのような制度のあった事を知らず、特典に洩れて悔やむ村民のないことを期したものであった。その甲斐あって他町村に比して多くの加入者を得ることができた。

七、過疎対策第五は天与の大自然を保護し活用することを考えた。美川スキー場は愛媛スキー連盟・愛媛山岳会・愛媛新聞社会部・愛媛大学山内浩教授（本村出身）らの推奨で昭和三五年に開発した。その外、四国カルスト地域県立自然公園林業構造改善の「いこいの森」開発、岩屋寺の集塊岩奇峰群・赤蔵ケ池周辺の風光美、あるいは岩屋寺栃群生林・二箇の矢竹等の植物、長崎の淡水魚アメノウオの養殖も四四年の着手で本県最初のもので、いずれも本村の

観る・動く・行なうという観光の一翼をになうものとして大いに将来が期待される。

八、過疎対策第六は教育問題である。特に小・中学校の在り方で、合併当時の児童生徒数は二、〇〇〇余人、それが現在八〇〇余人に激減している。この現状はいたずらに過去の母校に対する甘い感傷や思い出にひたることを許さない。目先の便宜に左右されてもならない。真に子供達の幸福のため大乗的な立場から早急に統廃合の実現を願って止まない。

九、最後に、国土調査を機会に長い間、私設登記所として処理して来た難問の大字東川二番耕地内の五二人共有名儀の広大な地籍が入会林野近代化整備法の適用によって単有化の方向に着手出来た一事は、地域の長い悩みであっただけに喜びに堪えない。

歴代村長・助役・収入役・村議会議長・副議長・議員・役場職員

村長

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名
初	三〇、四、一七	三四、四、一六	四、〇	満期	土居 通栄	四	四二、四、二八	四六、四、二四	四、〇	満期	新谷 優
二	三四、四、三〇	三八、四、二九	四、〇	〃	新谷 優	五	四六、四、二五				新谷 優
三	三八、四、三〇	四二、四、二七	四、〇	〃	新谷 優						

助役

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名
初	三〇、八、二八	三四、八、二八	四、〇	満期	高橋 末吉	四	四二、八、三一	四六、八、三〇	四、〇	満期	山下傳三郎
二	三四、八、二八	三八、八、二八	四、〇	〃	渡部 一加	五	四六、八、三一				山下傳三郎
三	三八、八、三一	四二、八、三〇	四、〇	〃	猪上 正度						

収入役

代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名	代	就職年月日	退職年月日	期間	摘要	氏名
初	三〇、八、二八	三四、八、二八	四、〇	満期	正岡悦次郎	四	三八、八、三一	四二、八、三〇	四、〇	満期	田野 正弐
二	三四、八、二八	三六、五、二四	一、九	辞職	正岡悦次郎	五	四二、八、三一	四六、八、三〇	四、〇	〃	土居 敏雄
三	三六、五、二四	三八、八、三〇	二、三	満期	猪上 正度	六	四六、八、三一				長岡道一

議長

代	就任年月日	辞任年月日	氏名
初	三〇、五、四	三四、四、一三	城山元
二	三四、五、八	三六、三、一三	坂本素行
三	三六、三、一三	三八、四、一九	堀尾好光
四	三八、五、七	四〇、三、一七	寺岡盛隆
五	四〇、三、一七	四二、四、一九	坂本素行
六	四二、五、八	四四、三、一九	村上清章
七	四四、三、一九	四六、四、一七	石元宗春
八	四六、四、三〇	四八、三、一九	天野登
九	四八、三、一九		村上清章

副議長

代	就任年月日	辞任年月日	氏名
初	三〇、五、四	三四、四、一九	坂本素行
二	三四、五、八	三六、三、一三	堀尾好光
三	三六、三、一三	三八、四、一九	篠崎幸作
四	三八、五、七	四〇、三、一七	片岡傳
五	四〇、三、一七	四二、四、一九	石元宗春
六	四二、五、八	四四、三、一九	久保金松
七	四四、三、一九	四六、四、一七	天野登
八	四六、四、三〇	四八、三、一九	露口薫
九	四八、三、一九		西本集

氏名	選出年月日	退職年月日	摘要
中西縫太郎	三〇、四、三〇	三四、四、二九	満期
團上貢	〃	〃	〃
大野正美	〃	〃	〃
西田和市	〃	〃	〃
天野重見	〃	〃	〃
久保金松	〃	〃	〃
山口岩雄	〃	〃	〃
村上清章	〃	〃	〃
小野豊	〃	〃	〃
山本喜之助	〃	〃	〃
小田宗廣	〃	〃	〃
松浦照夫	〃	〃	〃
松浦義長	〃	〃	〃
黒川元義	〃	三四、三、三〇	辞職
黒川未千夫	〃	三四、四、二九	満期
堀尾好光	〃	〃	〃
元川登	〃	〃	〃
寺岡盛隆	〃	〃	〃
土居武義	〃	〃	〃
大柳常三郎	〃	〃	〃
城山守恵	〃	〃	〃
坂本素行	〃	〃	〃
城山元	三四、四、二三	三四、四、二三	辞職
田代清一	三四、四、三〇	三八、四、二九	満期
森本正夫	〃	〃	〃
高橋政美	〃	〃	〃
古谷敏伸	〃	〃	〃
高岡久次郎	〃	三七、七、五	死亡
寺岡盛隆	〃	三八、四、二九	満期
西本集	〃	〃	〃
久保金松	〃	〃	〃
井上幸長	〃	〃	〃
岡崎廣衛	〃	〃	〃
村上清章	〃	〃	〃

大家常行	満期	三八、四、二九	三四、四、三〇	西本集	阪本寅夫	石元宗春	〃
石元宗春	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
土居武義	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
坪内要	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
谷昌美	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
高橋正直	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
平柳進	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
篠崎幸作	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
片岡傳	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
堀尾好光	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
坂本素行	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
天野登	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
村上清章	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
佐藤計三郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
土居衛	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
正岡ヨシエ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
堀尾好光	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
松本源三郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
中野豊茂	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
				田代清一	石元宗春	水元勇	西本集

選出年月日	退職年月日	摘要	氏名
四二、四、二八	四六、四、二四	満期	天野登
〃	〃	〃	露口薫
〃	〃	〃	後藤盈夫
〃	〃	〃	正岡ヨシエ
〃	〃	〃	堀尾好光
〃	四五、五、九	辞職	西田和市
〃	四六、四、二四	満期	篠崎幸作
〃	〃	〃	西森林太郎
〃	〃	〃	寺岡盛隆
〃	〃	〃	片岡保夫
〃	四六、三、一九	死亡	佐藤計三郎
〃	四六、四、二四	満期	久保金松
〃	〃	〃	村上清章
四六、四、二五			石元宗春
〃			園上幸吉
〃			西本集
〃			高木松太郎
〃			田代清一

選出年月日	退職年月日	摘要	氏名
四六、四、二五			水元勇
〃			猪上俊彦
〃			川崎清隆
〃			坪内益美
〃			村上清章
〃	四九、六、一〇	辞職	福山忠仁
〃			高木秀雄
〃			露口薫
〃			天野登

氏名	退職年月日	就職年月日
渡部一加	三四、八、二九 助役就任	三〇、三、三一
猪上正度	三六、五、二四 収入役就任	〃
田野正弐	三八、八、三一 収入役就任	〃
林　國太郎	三二、七、三一	〃
正岡悦次郎	三〇、八、二八 収入役就任	〃
中山親之進	三〇、九、一一 死亡	〃
正岡秀行	三五、四、三〇	〃
山本完三郎	四一、五、三一	〃
山内光秀	四一、三、三一	〃
正岡義数	四一、四、三〇	〃
向井　実	三五、六、三〇	〃
土居敏雄	四二、八、三〇 収入役就任	〃
伊藤孟寛	四八、三、三一	〃
西田高雄	三一、二、一一 三八、八、三一	再三四、九、一 〃
長岡道一	四六、八、三〇 収入役就任	三〇、三、三一
土居武男		〃
小倉　衛		〃

氏名	退職年月日	就職年月日
小田原英雄		三〇、三、三一
木下久敬	四八、九、三〇 教育長就任	〃
高岡忠義		〃
畝　繁雄		〃
久保若松		〃
渡辺昭男	三〇、五、三一	〃
西原きみ子	三二、一〇、一五	〃
大野和男		〃
中山義正		〃
下方音数		〃
篠原　拡		〃
西森　強		〃
渡部　守		〃
大上輝雄		〃
中西玲子	三四、六、一五	〃
山田八重子	三三、六、三〇	〃
山本明雄	三八、一二、四	〃

就職年月日	退職年月日	氏名
三〇、三、三一	三三、三、三一	山之内正人
〃	三〇、五、三一	近藤良雄
〃	三三、一二、三〇	山口美代子
三〇、四、一	四〇、一二、三一	畝比奈子
三一、一、二〇	三七、五、一一	平塚國重
三一、五、一	三三、二、一五	土井昭二
三二、一〇、一		梶家修
三三、一、四	三六、二、二八	平塚ヨシミ
三三、四、一四	三五、三、九	片岡定志
再三五、五、一〇	三四、九、三〇	土居一太
三三、一一、一	三八、一二、三一	高木美恵
〃	三八、一二、一五	井上貴美子
三三、一一、一五	三四、八、三一	山本隆子
三四、四、一	四二、一〇、三一	斉藤ミツコ
三四、四、六		平岡哲郎
三四、九、一	三八、一〇、一〇	堀尾忍
〃	三八、二、二八	佐藤道夫
〃		岡本弘子

就職年月日	退職年月日	氏名
三五、四、一		田中盛重
〃	三九、三、三一	竹崎時子
三五、四、八		小椋清隆
〃		中山邦夫
三五、一二、一六		森川カヤコ
三六、四、一		山村利一
〃	四六、三、三一	井手窪真佐子
〃	三七、三、三一	星森節子
三六、四、八	四一、三、三一	平山ツギエ
三六、八、一		土居喜三子
〃	三七、三、三一	渡辺啓美
三七、四、一	三九、一、九	古川容子
〃	四一、一二、三一	大野ミツ子
〃		浜田久恵
〃	三七、八、三一	池田悦子
〃	四二、二、二八	川崎久恵
三七、五、一六	四一、五、一	小西堅
三七、六、一	三八、一〇、三一	谷光生

三七、六、一		高岡正幸	三九、八、一		上岡須真子
三七、九、一	三九、一、三一	下土井和子	三九、九、一	四一、四、三〇	三原清子
三七、一〇、一		坂田清	四〇、一、一		天野秋一
三八、四、一	三八、一二、三一	長岡若子	四〇、四、一	四三、三、三一	田中幸恵
〃		神中信子	四〇、四、二五	四二、一二、三一	土居キサコ
〃	四二、八、三一	竹中チエ子	四〇、六、一	四四、三、三一	猪上園枝
〃	三九、八、三一	高岡和子	四一、一、一		土居勝竹
三八、六、一		松岡秀子	〃	四三、二、三	古川宜史
〃	四〇、六、三〇	大野深雪	〃	四二、五、三一	篠原秀隆
〃	四一、一、三一	小西寿満子	四一、四、一		水元ツタエ
〃		古谷淳一郎	四一、五、一	四九、一、三一	下土居美子
三八、一〇、一		土居修	四一、一〇、一	四四、三、三一	西本静子
三八、一二、一六		隅田竹子	四二、一、一	四四、七、三一	山田洋子
三九、一、一		猪上桂一郎	〃		羽沢春隆
三九、四、一	三九、八、一	大内ヤヨイ	四二、三、一	四四、一、三一	三好貞子
〃		高橋フミエ	四二、四、一	四四、三、三一	坂口俊子
三九、八、一		福原市義	〃		大西和孝
〃	四〇、九、三〇	小野敏子	四二、一一、一六	四三、七、三一	篠崎真弓
〃	四〇、三、三一	松岡光柄	四三、一、一	四五、一二、三一	松下クニコ

就職年月日	退職年月日	氏名	就職年月日	退職年月日	氏名
四三、三、二〇	四五、三、三一	土居やす子	四四、四、一		釣井博美
四三、四、一		高橋裕	〃	四七、三、三一	竹下信枝
〃	四八、三、三一	高橋千恵子	〃		中川真佐子
〃	四八、三、三一	高橋末広	〃		岡本ナミ子
〃	四九、三、三一	丹波二美	四四、四、一八		倉橋孝子
〃		西森貞美	四四、六、一		大政忍
〃	四七、三、三一	下土居博美	四五、四、一	四九、三、三一	土居小都枝
〃	四三、八、二四	小椋緑	〃	四九、四、三〇	森岡由起子
〃	四八、三、三一	福田千代子	〃	四九、三、三一	宮城恵美子
四三、八、一	四四、三、三一	成川キミコ	〃	四九、三、三一	木下規久子
四三、一二、一	四七、一二、三一	岡崎たけの	〃	四九、三、三一	猪上美喜恵
四四、一、一	四五、一二、三一	吉田アキコ	四五、一二、二		山内末男
四四、二、一	四六、一二、三一	大野まさ子	四六、一、一		土井恵子
四四、三、一	四六、八、三一	渡辺節子	〃	四九、三、三一	正岡照美
四四、四、一		丹波宮枝	四六、四、一		佐藤昌保
〃		続木豊子	〃		森本恵
〃	四五、三、三一	中久保明美	〃		西山弘子
〃	四六、三、三一	近藤文子	〃		宮城まり子

四六、四、一		西原恵子	四九、四、一		梅木美佐子
四七、一、一	四八、四、三〇	佐伯マサ子			土居浩
〃		上田敬子			秋山由美子
四七、四、一		片岡美代子			玉井美保子
〃		山内あけみ			丹波寿美
〃		西山明美	四九、一一、一		安宅八重子
〃		白石美津子			
〃		高山稔明			
〃		室崎洋子			
四八、四、一	四九、一、三一	渡辺慶子			
〃	四八、一二、三一	高橋君子			
〃		猪上定幸			
〃		田野典孝			
四八、一二、二		竹口和博			
〃		岡田照美			
四九、四、一		金子幸重			
〃		倉橋博子			
〃		倉橋まち子			
〃		木下和恵			